

# 教育センター便り

長野市教育センター  
長野市大字鶴賀550番地2  
TEL 026-226-7486  
FAX 026-264-7570  
責任者 佐藤 文博



季節の言葉  
〜冬の朝〜

吉田小学校 五年二組

北澤 貫徹

冬は みかん。

こたつに 入りながら 食べるのは  
言ふべきにもあらず。

あまいのも、また さらでも

少しすっぱいのも

いとつきづきし。

かわをむくときに

みかんの汁がつくのは わろし。

## 「未来を切り拓く リーディングスキル」

教育長 丸山 陽一



予測困難な時代を迎え、教育の役割は、一層重みを増しております。中央教育審議会 教育課程企画特別部会の「論点整理」（令和7年9月25日）で、次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方として、「生涯にわたって

主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手を育む」との方向性が示されました。

そこで、改めて、「子どもたちが未来を切り拓くために必要な力とは何か」を考えた時、その一つとして「リーディングスキル」が思い浮かびました。

ここでいう「リーディングスキル」とは、単に文章を読む技能に留まりません。デジタル技術の発展、特に生成AIの進化が社会構造を根本から変え、「独自の発想や視点に価値が置かれる」時代において、子どもたちが直面するのは、膨大な情報の中から本質を見抜き、複雑な課題を深く読み解き、思考・判断・表現に活かす、高度な「読み解き能力」です。

「深い学びの実現」には、知識及び技能（タテの関係）と、思考力、判断力、表現力等（ヨコの関

係）を一体的に育成し、「知識の理解」が「生きて働くように深く学ぶ」こと、そして「思考力・判断力・表現力等」が「未知の状況でも課題解決につなげていけるよう『質』を高める」ことが必要です。その基盤に「リーディングスキル」があるのではないかと感じます。

さらに、「質の高い探究的な学び」を実現するためには、情報を批判的に読み解き、その真偽や影響を吟味する等の情報活用能力を、自らの「好き」や「得意」を原動力とした探究の基盤に位置付けることが重要です。そのプロセスを下支えするのも「リーディングスキル」ではないかと感じます。

こうした学びを通じて、子どもたちが自ら問いを立て、情報を深く読み解き、対話を通じて考えを深め、課題を解決できるようになるためには、先生方自身が変化に対応しつつ、より良い授業の在り方を問い続け、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの教材研究や授業改善を楽しむことが大切なのではないでしょうか。

YOASOBIの「群青」の一節に、「好きなものと向き合うことで触れた まだ小さな光 大丈夫 行こう あとは楽しむだけだ」とあります。

長野市立小・中学校の全ての子どもたちが、予測困難で、不確実な時代においても、未来に希望をもち、自分の「好き」や「得意」、「強み」を信じて、ワクワクしながらチャレンジし続けられるよう、引き続き、先生方の熱意と創造性に満ちた教育実践を心から期待しております。

## 初任者研修「冬期研修」 ～56名で共に学んだ1年間のまとめ～

2月3日（火）に初任者研修（1年次）の最後の校外研修「冬期研修～1年次のまとめ～」が開催されました。初めに当教育センター佐藤所長から「1年次研修を修了するにあたって」という講義を受けました。子どものよさを認め、職員や保護者と共有することの大切さを学び、「教師の幸せ」について考える時間となりました。

### ◇受講者の感想から

- 普段の様子から、子どもが成長したことに気が付くことが大切だと学びました。そして、その姿を保護者の方、先生方と共有して、共に伸ばしていく姿勢を大切にしていきたいです。

次に、分散会で、自身の1年間をふりかえり、感じたことや学んだことを共有し、考えを深めました。それぞれのグループで初任者研修推進委員の先生方や指導主事に助言もいただき、有意義な時間となりました。



### ◇受講者の感想から

- 先生方の実践の様子を聞いて、自分自身はどう取り組んでいるのかを振り返ることができました。生徒が振り返りをしながら学習をしているのと同じように、私達教師も自らの実践や行動を振り返り、様々なことを吸収していかなければならないと思いました。

最後に、近藤守前教育長から「子ども達に先生と認めてもらえたか」という講話をいただきました。4月のスタート研修、8月の夏期研修に続き、1年間のまとめとなるお話をしてくださりました。



### ◇受講者の感想から

- 「授業をするのは先生だけど、勉強するのは子ども」という近藤先生の言葉が心に残りました。子ども達とたくさんコミュニケーションを取り、心でつながっていくことの大切さを教わりました。授業をどう進めるかではなく、子ども達がやりたくなる授業を考えていきたいです。

本年度は56名の初任者が共に学び合いました。1年間の研修の中で、お互いの実践を語り、共に悩みを相談し、充実した初任者研修となりました。これからも築いた関係を大切に、共に学び合う関係であってほしいと願っています。みなさんのこれからの活躍を応援しています。（末松 辰規）

## キャリアアップ研修Ⅰ「まとめ」 ～学び続ける教師を目指して～

キャリアアップ研修Ⅰ「まとめ研修」が、1月15日に開催されました。はじめに、教育センター佐藤文博所長より、「学び続ける教師を目指して」という演題で講話がありました。

### ◇受講者の感想から

- 前途を内省し、自らの強みを磨きながら、教師として、そして一人の人間として成長していきたい。「伸長期」を意識し、日々邁進していきたいと思う。
- 「長野県教員育成指標」の中でも、今まであまり意識してこなかった項目があることに気付いた。バランス力のある教師であるために、これからも学び続ける姿勢を大切にしていきたい。

続いて、本年度に実践した授業公開や選択研修からの学びを発表し合う演習「私の授業づくり」を行いました。



### ◇受講者の感想から

- 同じキャリアの先生方と話すことで悩みや課題をより深く共有することができた。異校種・他教科の先生方の実践から学ぶことは多く、この研修ならではの学びがあったと感じている。
- 子どもたちがワクワクするような仕掛けや工夫を、日々試行錯誤しながら実践されていることがよく伝わってきた。この刺激を、明日からの自分の教材研究の力に変えていきたい。

最後に、これまでの経験を振り返りながら、5年後や未来の自分について語り合うグループ演習を行いました。



### ◇受講者の感想から

- 教員人生を振り返り、自分が大切にしてきたこと、これからも大切にしたいことが見えてきた。他の先生方の「強み」にも触れ、元気をもらうことができた。
- これまで、数えきれないほど多くの方々に支えていただけてきたことに、改めて気付かされた。未来の自分も、周囲の先生方を支えられるような存在でありたい。

グループの仲間が抱える課題に真摯に向き合い、熱心に語り合う先生方の姿からは、時折笑い声もこぼれ、未来への希望が感じられました。

キャリアアップ研修Ⅰを終えた受講者の先生方は、これから学校の中核として、ますますご活躍されることと思います。今後も、学び続ける教師としての歩みを力強く進めていかれることを、心より願っております。（柳澤 征之）

## キャリアアップ研修Ⅱ「まとめ」 ～これまでの経験から未来の私を考える～

キャリアアップ研修Ⅱ「まとめ研修」が、1月22日に開催されました。はじめに、前教育長・近藤守先生による講話「学び続ける教師」を拝聴しました。

### ◇受講者の感想から

- ・「学校は何をする場所なのか。」という近藤先生の言葉が深く心に響いた。学習以外で教師ができることは何か、子どもたちとどのような関係を築き、育てていくかを考え、実践していきたい。
- ・人と人とのつながりが以前よりも希薄になり、個が重視される時代だからこそ、クラス内の人間関係づくりにより一層力を入れていきたいと思った。
- ・これまでのやり方にとらわれず、新しい方法で、新しい環境づくりに取り組んでいきたい。

続いて、本年度実施の授業公開について意見交換を行う演習「私の授業づくり」に取り組みました。



### ◇受講者の感想から

- ・先生方の実践はどれも素晴らしく、学びが多かった。異校種・他教科のグループだったことで、多様な視点から学習環境づくりを考えることができた。
- ・授業づくりは思うように進まず苦労もあったが、他の先生の実践や助言を参考にすることで、普段と違う子どもの姿に出会うことができた。このような授業公開の機会は貴重だと改めて感じた。

最後に、「未来の私へ」と題した演習で、「教師観・仕事観・人生観」について、本音で語り合いました。



### ◇受講者の感想から

- ・それぞれ異なる教師人生を歩んできたつもりでも、同じ節目にいる先生方の悩みが自分と重なることに気づき、安心した。教師としての自分だけでなく家庭での自分も大切にし、その姿を学校の子もたちにも見せられる先生でありたいと思った。
- ・自己分析を行い、それを言語化したことで、これまで意識していなかった自分に気付くことができ、有意義な時間となった。
- ・今回のテーマ「変えないこと、変えたいけれど変えられないこと」について語り合うこのような研修を、ぜひ校内の同僚とも共有したいと思った。

演習や感想から、先生方が日頃から子どもたちに寄り添い、現状を少しでもよくしようと熱心に取り組まれている様子が深く伝わってきました。

キャリアアップ研修Ⅱを節目に、今後も学校の中核を担うミドルリーダーとしてのご活躍を祈念しております。  
(柳澤 征之)

## 出前研修 全教職員から少人数の 研修まで、ニーズに合わせて実施中!

今年度も、各学校の願いやご要望に寄り添い、開催日や研修内容を柔軟に決定して、6校、71人の皆様に受講していただき、実施してきました。今回は、「特定のツールの基礎固め」を重視した少人数研修と、学校内の人材も活用した「習熟度別の選択制」を取り入れた全職員参加の2つの事例をご紹介します。

☆信州新町小学校出前研修から (訪問日 6/25)

### <4人でじっくり!操作習得を重視した実技型研修> オクリンクプラス 生成AIの活用 60分

- ・オクリンクプラスの、教師・児童両視点で共同編集等の操作を確認し、生成AI活用のイメージを掴む体験を行いました。

#### 【感想より】

- ・なかなかイメージが持てなかったオクリンクについて、児童側、教師側両面で学ばせていただき大変ありがたかった。…また、教育センターの有効なリンク等も教えていただき大変ありがたかったです。
- ・自校で研修が受けられる体制がありありがたい。オクリンクプラスは先代のオクリンクと比べると飛躍的にできることが増えた気がする。…

☆北部中学校出前研修から (訪問日 8/20)

### <教職員32人参加 レベルに合わせ、習熟度別 コースと実践紹介>

#### AIの活用 Canvaの活用 90分

- ・全校体制で自校の「スペシャル講師」も活躍し、多角的な研修を実施しました。前半は生成AIのガイドライン等の全体研修、後半は初級(GeminiやNotebookLMによる校務効率化)と中級(自校の教諭によるCanvaや生成AIの授業活用事例)のコース別に分かれて体験しました。

#### 【感想より】

- ・NotebookLMは初めて使ったが、レポート分析などで使ってみたい。できることが多くて驚いた。
- ・丁寧に説明していただき、実践もあり、「そんなことができるんだ…」と驚きの90分でした。どんなものだろうと気にはなっていましたが、なかなか自分からやってみることができず、躊躇していたので、今回研修で教えていただき、とても勉強になりました。
- ・学校に居ながらにして、多くの職員で情報を共有して学べる出前研修は大変ありがたい。

出前研修は2人以上集まればいつでも実施可能! 入門レベルから、校務の効率化、最新ツールの活用まで、それぞれの学校のニーズに応じてカスタマイズ可能です。来年度も、皆様の学校へお伺いできるのを楽しみにしております!  
(中澤 康匡)

## 令和7年度 研修講座の成果と課題

○ **研修講座への参加者数**

- (1) 希望研修：のべ1,235名
- (2) 指定研修：のべ2,976名

○ **講座に対するアンケート結果**

(初任研、キャリアUP I、キャリアUP II、キャリアUP IIIを除く2,674名)

**【アンケートの項目】**

- 1：本講座はあなたにとって良いものでしたか。
- 2：演習・テキスト・資料等の内容は、今後の役に立つものでしたか。
- 3：研修講座で学んだことを自校の教育活動に生かしたいですか。

項目	A (かなりそう思う)	B (そう思う)	C (そう思わない)	D (全くそう思わない)
1	61.4%	37.8%	0.8%	0.0%
2	59.0%	40.2%	0.8%	0.0%
3	62.1%	37.1%	0.8%	0.0%

○ **講座目標に対するアンケート結果**

目標を達成できたか	A (かなりできたと思う)	B (できたと思う)	C (できたと 思わない)	D (全くできたと 思わない)
全項目を まとめて	40.7%	57.0%	2.0%	0.3%

○ **「私の研修」※1に対するアンケート結果**

※1 「私の研修」は、研修計画の立案や研修履歴の記録ができる記入簿です。

項目	A (使っている)	B (不完全だが使っている)	C (使っていない)	A + B
「私の研修」を使っているか	20.5%	41.2%	38.3%	61.7%

○ **今年度の研修講座を振り返って**

＜全体を通して＞

アンケート結果では、研修講座に対しては受講者の99%の皆さんに、講座目標の達成に対しては97%の皆さんに肯定的に評価していただきました。

今年度は、研修講座117講座と出前研修6回を実施し、受講者の延べ人数は、希望研修1,235名、指定研修2,976名、合計4,211名という多くの先生方が受講しました。

教育の動向や課題に対応した講座を構築したり、国立教育政策研究所の調査官、大学教授、有識者等多くの講師を招聘したりして、「学び続ける教職員の資質・能力の向上」に寄与することができたので

はないかと考えています。

熱心に受講していただいたこと、ご指導により充実した講座にさせていただいたことなど、当センターの研修講座に関わった全ての方に感謝いたします。

＜しなのきプランIIの推進について＞

今年度は、しなのきプランIIの2年目ということで、その理念と方向性を踏まえ、センターの研修も連携して実施してきました。各講座と「しなのきプランII」の4つの重点プロジェクトとの関連を明確にして、先生方が「しなのきプランII」を意識しながら、自らの力量向上に取り組めるように進めてきました。また、特に関係が深い講座については重点講座に設定して、優先的に受講してもらえるようにするとともに、管理職や指定研修の中にしなのきプランIIの内容を盛り込んで研修を進めてきました。

＜私の研修について＞

全国教員研修プラットフォームPlantに研修履歴を記録するので、「私の研修」は、研修計画立案の際に活用することを推奨する予定です。

○ **来年度に向けて**

「しなのきプランIIのプロジェクトごとに講座を構築」、「優先的に受講する重点講座を設定」、「しなのきプランII推進のための講座を設定」、「教育DXの推進」の4点を重点にして講座を構築してまいります。

県教委のSTEP2030における「これからの教員研修」の方針にあわせ、初任者研修や経年研修において、研修内容と期日の見直しを行います。

全国教員研修プラットフォームPlantへの参入に関わり、「学校全体の申し込み手順」、「個人の申し込み方法」などをきめ細かくお伝えします。「申込手順の方法」「受講計画一覧表」等を用いて、各校が計画的・戦略的に受講できるようにします。

今後は、Plantを活用して下記のように研修を進めていくこととなります。各自が、主体的に自身の力量向上を目指していく方向になることを期待しています。

＜学び続ける教職員を目指して＞

- ① 「私の研修」を活用した重点目標の決め出し
- ② Plantで重点目標を登録
- ③ 各校における計画的・戦略的な受講計画
- ④ Plantで各自の受講申込み
- ⑤ 校長による申込み承認・校長との面談
- ⑥ 研修の実施
- ⑦ 受講履歴の記録
- ⑧ 受講履歴の出力
- ⑨ 自己の受講の見返し・校長との面談

(宮澤 剛彦)

## 理科教育センター

本年度、下記の学習及び教職員研修・支援を行いました。

### 1 小学校6年生の理科学習

長野市全小学校の6年生が、一日当センターで学習します。1時限80分、午前2時限、午後1時限の計3時限授業です。事前に各学校から希望のあった実験授業2つを行い、天文学習は必修とし、学級単位で行う利点を生かし、プラネタリウムの座席の間隔を十分に取って行いました。

また、学級担任が学習指導案をもとに補助授業者学習指導計画を立てることで、理科指導の力量を高めていただく機会となるようにしています。

＜授業の学校・学級別の選択状況＞

番号	学習内容	実施状況		
		学校数	学級数	%
1	生き物と食べ物	21	50	24.6
2	だ液のはたらき	4	6	2.8
3	てこのはたらき	0	0	0
4	電気の利用	14	28	13.2
5	ものを燃やすはたらきをする気体	0	0	0
6	ものが燃えた後の気体	4	8	3.8
7	水よう液の性質	6	10	4.7
8	地層と岩石	33	69	32.6
9	プログラミング	22	41	18.8
	天文	52	106	100

各校がどのような視点から学習内容を選択したのか、学習後の意見や感想も含めてアンケートに記入していただいております。来年度に生かしていきたいと考えています。

#### 《先生方の感想》

- プラネタリウムの授業では、下弦の月、上弦の月の形を詳しく知ることができました。月にはたくさんのクレーターがあること、また、長野県にもクレーターがあると知り驚きました。
- プログラミングの学習では、プログラムを組んでオルゴールを鳴らしたり、電球をつけたり消したりする方法を、自分の手でつくることができて楽しかったです。
- 微生物の授業で、私は生物が苦手なのではじめ怖かったです。顕微鏡で観察しているうちに楽しくなってきました。

### 2 4年生の天文学習

天文学習を希望した19校の4年生に、3学期を中心に行いました（一部6年生と同日実施）。4年生では「月や星の観察」がありますが、授業で事象に直接関わるのが難しい内容です。当センターのプラネタリウムを使った学習を活用してください。

### 3 教育支援センターの理科学習

春と秋の2回、教育支援センターの小中学生が当センターに来て理科学習を行いました。延べ46名参加。

### 4 教職員研修講座

教育センター研修講座「児童の興味や疑問を生かす理科授業づくり」として5月16日中学年、5月20日高学年、5月13日中学校の3つに分けて行いました。実験装置・器具の使い方、教材の製作、観察・実験場面での支援の方法等について研修を行いました。

#### 《参加者の感想》

- 天体、電流は自分でも理解しきれていないので、とてもありがたかった。海の食物連鎖は楽しいもので、子供たちにも体験させたいと思いました。
- 明日からの授業に生かせるヒントがたくさんありました。また相談させてください。研修はやっぱりいいですね。

### 5 理科教育に関する教職員への支援

(1)～(4)のような支援を行いました。理科学習や理科室管理等、理科に関することお手伝いします。

#### (1) 教材の提供〈校数〉

ホウセンカ〈43〉オシロイバナ〈18〉オオカナダモ〈5〉ホテイアオイ〈36〉メダカ〈27〉ミドリムシ〈29〉ゾウリムシ〈31〉3年種子セット〈37〉火山灰〈28〉ミョウバンの結晶〈27〉カブトムシ幼虫・成虫〈33〉ホウセンカ株〈1〉ミョウバン結晶〈48〉食塩結晶〈4〉

#### (2) 実験観察器具の貸出〈件数〉

双眼鏡(3) フィールドスコープ(3) 三脚(3) 人体骨格模型(4) ホワイトボード・ボード用マーカー・ボード用イレイサー(2) ルーペ(2) 堆積岩標本(1) 演示用電磁石(1) マグデブルグ半球(1) スライダック(1) 液体窒素保存瓶(1) デジタル天体望遠鏡(3) 星座早見盤(2) 浣腸器(1) シャーレー(1) 顕微鏡用プレパラート(1)

#### (3) 「理科教育センターだより」「天文情報」の発行

#### (4) しなのき派遣〈4〉

プログラム学習支援・天体観察助言 等

(早川 和仁)

## ～教育研究委員会の授業公開から～

### 社会科教育研究委員会 昭和小学校6年 公開授業から

社会科研究委員会では、「社会とのつながりを感じ、見通しをもちながら、自ら関わりに行く児童生徒の育成」をテーマに、実践研究に取り組んできました。

#### 【自己課題】

子ども達が「え!？」「なんで!？」「もっと知りたい!」と思える授業づくり

<6年『明治の国づくりを進めた人々～昭和小150年の歴史を手がかりに～』の授業から>

事前に研究委員の塚原先生(通明小学校)が同単元で授業実践を行いました。そこで出てきた反省点をもとに単元・授業構想をアップデートしました。

#### 【単元・授業の構想にあたって】

- ・150周年記念誌を素材研究し、子どもにとって身近な「学校」を教材化することで、社会的事象とのつながりに気づきやすくする。
- ・資料提示や子どもの実体験の対話から生まれる「ズレ」から問いを設定する。

授業冒頭で、江戸時代の寺子屋と明治時代にできた学校の様子を比較した上で、「みなさん(が過ごす)なら、どちらが良い?」という発問に対して、多くの児童は「寺子屋がいい」と答えました。児童は明治時代の学校の時間割や授業内容の負担感等から、自分のペースと自由な雰囲気学べる寺子屋を支持したと思われます。授業者は明治政府が行った学制の制度を説明すると、児童数名が「なんで?」とつぶやき、学習問題「新しい政府が明治時代の初めに、全国に小学校をつくることを命令したのはなぜだろう?」が設定されました。

「子どもに学力をつけたかった」という予想をもったA児は、まず一人で本時の資料(スコットの教え)を読み取り、公平で効率的に学習できる学校の仕組みに気がきました。その後、班や学級全体で、日本が欧米に追いつくために学校をつくったことや、女子も学習の機会が得られたこと、地域の人々の願いで多くの子どもが学校に通えるようになったこと等の情報共有がなされました。



授業末の振り返りでA児は「外国に追いついて多くの人が学んで豊かに生活できるようになった」と記述しました。児童にとって身近な「学校」という題材を通して、日本の近代化の様子に気付く姿があったと思われます。

#### ◇参観者の感想から

子どもと一緒に学習問題をつくることで、意欲的に資料を読み取り、情報を共有する児童の姿がありました。限られた時間のなかで多様な資料をいかに児童が読み取るか、支援のあり方について今後も考えていきたいです。

(中村 広登)

### 理科教育研究委員会 三陽中学校3年 公開授業から

理科研究委員会では、「子どもが主体的に問題解決をしていく理科学習」をテーマに、授業研究に取り組んできました。

#### 【めざす子どもの姿】

- ・自ら問いを立て、方法を考え、仲間と協力し、新たな価値を創り出す生徒像

#### 【育てたい非認知能力(行動指標)について】

- ・経験から学び、前向きに取り組む姿
- ・他者の考えを聴く姿

<3年『力のはたらき方』の授業から>

授業者は、単元の終末に「水中で物体が浮きも沈みもしない状態をつくるにはどうすればよいか」を考える場面を設定し、これまで学習してきた力のはたらき方の既習事項を活用して思考を深める授業を構想しました。

#### 【単元・授業の構想にあたって】

- ・既習事項を活用して、仮説を立ててから実験に取り組み、現象の説明を自分なりの方法で表現できるような授業展開とする。
- ・デジタルばねばかりを活用し、物体にはたらく重力と浮力のつり合いを値で確認できるように工夫する。

前時、浮力が物体の水中に沈んでいる部分の体積によって決まることを学んだ生徒達は、本時の課題「水中で浮きも沈みもしない状態をつくるにはどうすればよいか」という学習問題について興味を持って考え始めます。

グループで話し合い見通しをもったうえで実験がスタートしました。

多くの生徒は、物体にはたらく重力と浮力の2力をつり合わせ、合力を0にすることに着目し、水中に沈める瓶の中に入れる水の質量を調節するという見通しを持った追究を行うことができました。



【試行錯誤しながら追究する姿】

一方で、考察の場面では実験の結果を図示したり、自分の言葉で表現したりするように促したが、表現が難しい生徒が多かったです。実験がうまくいかなかった班もあったので、自身の探究の過程を振り返る場面に焦点を当てていく視点が必要だったという意見も研究会で出されました。

#### ◇参観者の感想から

追究の中で、生徒達は話し合いながら試行錯誤し、粘り強く追究していました。「経験から学び、前向きに取り組む姿」や「他者の考えを聴く姿」を多く見ることができました。ねらっていた非認知能力をはたかせることができる学習となっていました。

(末松 辰規)

## 体育・保健体育科教育研究委員会 大豆島小学校6年 公開授業から

体育・保健体育科研究委員会では、長野上水内体育学習指導研究会との連携の下、「すべての子どもが夢中となり、健康で豊かなスポーツライフの実現をめざす体育学習の創造―見方・考え方を働かせ、もっと『わかる』『できる』『かかわる』体育学習―」をテーマに実践研究に取り組んできました。

### 【願う児童の姿】

- ・自分に合った技や練習方法を自分で考え、仲間と声をかけ合いながら、できるようになるまであきらめずに取り組む子どもの姿。

<6年『跳び箱運動』の授業から>

授業者は、児童一人一人が工夫したこと、努力したこと、仲間と支え合ったこと等、様々な「よさ」を認め合えるよう、本単元を構想しました。

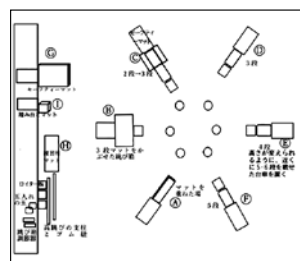
### 【単元・授業の構想にあたって】

- ・単元前半は「切り返し系」、単元後半は「回転系」を追究する展開を位置付ける。
- ・児童が自ら技や課題、練習方法を選べるように、「技のポイント」や「つまずきに応じた練習方法」を図式化した「技マップ」を提示する。

準備運動では、「技マップ」にある練習方法にサーキット形式で取り組む時間が設けられていました。児童は、跳び箱運動の基礎的な感覚を養うだけでなく、自らの課題や、めあてを確認していました。

本時、台上前転に取り組んだA児は、映像資料と自分の試技とを見比べる中で「腰の高さが低い」という課題を見いだしました。その解決に向けた練習方法を考え始めたA児は、「技マップ」を参考に、高跳びの支柱とゴム紐が設置された場で、腰を上げる練習を選択しました。その後、A児はマットを重ねた柔らかい台を選択し、台上前転を成功させ、友と喜びを分かち合う姿が見られました。

このようなA児の姿を支えていたのが、図のような放射状の場の設定でした。これは、跳び箱が苦手な児童の「失敗を見られたくない」という心理面の配慮であり、子どもたちが自然と中央に集まり、豊かな交流が生まれました。



【本単元の場の設定】

### ◇参観者の感想から

つまずきに応じた学習の場が用意されており、運動が苦手な児童への支援が充実していると感じました。講師の先生の講演会でのご指導から、子どもたちが主体的に学ぶために、技のポイント等に関する教師の積極的な指導が重要であることを学び、専門性を磨きたいと感じています。

(大野 高志)

## 令和7年度教育研究を振り返って

「しなのきプランII(2024～2026年度)」と長野市の教育課題を踏まえ、共通テーマを「非認知能力を育む」とし、【子どもを観る・子どもの声を聴く・子どもと対話する】ことなどを通して、子どもが主体的に学び、他者と協働しながら問題を解決していく力を育む授業を目指し、ICTの活用を図りながら実践的な研究を推進してきました。今年度も長野上水内教育会との共同研究を継続し、研究成果を共有するとともに、成果の普及と活用の強化をはかっています。

長野市教育センターの授業公開は、各学校の協力を得て小学校、中学校合わせて14の授業が公開され、のべ372名の先生方に参観いただきました。特に、今年は教育会の体育同好会とタイアップし、公開授業に加え講演会も開催でき多くの先生方にご参加いただきました。

また、外国語の授業公開は、研修講座に位置付け連携して実施しました。さらに、研究委員による実践発表なども多くの研修講座で行われました。

今後、これらの授業公開を含めた研究委員それぞれの研究成果を「長野市の教育」にまとめ、ポータルサイトに掲載します。さらに、授業公開に参加できなかった先生方のために、算数、社会、体育の授業の様子を教員研修用ビデオ教材としてまとめ、ポータルサイトに掲載する予定です。現在24本のビデオ教材が掲載されています。研究のまとめや教員研修用ビデオが、各校の校内研修で活用されることを期待しています。

### 【研究委員のアンケートから】

- ・指導案や教材のアイデアを研究委員会の中で共有し、自校の児童の実態に合わせて授業を更新していく研究の進め方ができたのはありがたかった。また、児童が自ら社会に関わりたいと思えるような授業展開の工夫や資料の作り方など新たに勉強になることも多く、専門性が高まったと感じる。(社会科研究委員)
- ・研究テーマに沿ってリレー形式で委員の先生方で授業を繋いでいくことで、それぞれの学校の児童・生徒に合わせた授業を考えたり、授業後の研究会がどんどん深まったりしていったと感じる。自分の1回の授業だけでなく、その後も継続的に委員の先生方の授業を見ることで、授業観の深まりを感じた。(外国語活動・外国語科委員)

来年度最終年となる「しなのきプランII」の方向性を大事にしなが、長野上水内教育会との共同研究をより一層進めてまいります。(片山 洋一)

## 教育相談室から ～インクルーシブのバロメータ～

子どもの数が減っている中で、年々就学相談の数は増加しています。必然的に特別支援学級等に入るお子さんも増えています。10年前に遡って具体的に数値を示してみましょう。

申し込み件数：平成28年度 400件      令和6年度 643件      令和7年度 655件

自閉症・情緒障害学級 入級判断：平成28年度 148件      令和6年度 247件      令和7年度 221件

お分かりのように、10年間で申込件数は約250件増、自閉症・情緒障害学級判断は約100件増（令和6年度）ということになります。A小学校は全校児童数400人台の内、特別支援学級在籍が40人台（特別支援学級7）であり、実に全校の1割が特別支援学級に在籍し通常の学級を離れているのです。

勿論、入級等が必要なお子さんにとってはそうした学びの場が有効であることは当然のことです。ただ、大局的にみたとときに、私たちが大切にしているインクルーシブに照らしてこのような状況をどう考えたらよいかということです。明らかに逆行していると言わざるを得ないのではないのでしょうか。

ではなぜこのような状況になっているのでしょうか。その大きな理由は、通常の学級の授業の在り方にあるのではないのでしょうか。学級は子どもと教師から構成されていますが、授業があまりにも担任対子どもとの往復という、一直線の図式に傾き過ぎているのではないのでしょうか。もっと「子ども対子ども+教師」という授業の構造を指向したらどうでしょうか。つまり、子ども同士の学び合いに軸足を置いた授業づくりに転換する必要があるのではないのでしょうか。

そうすることで申し込みの多くの部分を占めている所謂グレーゾーンのお子さんにとっても、分からないことを友だちに気兼ねなく聞けたり教え合ったりすることができる居心地のよい学びの環境が育つのだと思います。それが多様なお子さんが通常の学級に包摂されることにつながるのではないのでしょうか。

ある中学校の授業参観の中で、自閉症のお子さんが通常学級のグループ学習で生き活きと学習していました。その自閉症のお子さんを取り巻く級友の様子からも、そのクラスはとても居心地のよい豊かな集団でした。当の自閉症のお子さんがあるからこそだと思います。

ある小学校からの申し込み資料に「本児は個別指導やクラスメイトと共同で取り組む形を授業に取り入れることで、課題に向かうことができている…できる限りグループ学習を取り入れ、クラスメイトと一緒に課題に取り組めるような環境にしている」という記載がありました。参観してみると、そのおさんは子ども同士のグループ学習の中で伸び伸びと話し合いをしていました。教育支援委員会での判断は「通級による指導（LD）」となり、今いる学級を離れずに活動が続くことになりました。

B小学校は全校児童数が600人台の内、特別支援学級在籍が10数人（特別支援学級3）です。この小学校を参観しますと、学校全体で子ども同士の話し合いやグループ学習が大切にされていました。先生方の研修も活発に行われていました。

長野市では久しく特別支援教育が独立した教育の一分野だと認識される向きが強かったと思います。もっとインクルーシブという概念を真ん中に置いて教育全体をとらえる必要があると強く感じます。教育相談室からインクルーシブに向けたどのような発信やかかわりができるか、これを今後の大きな課題として次年度につなげていけたらと思います。

（大井 透）

### 編集後記

2月20日に令和7年度第2回教育センター運営委員会を開催しました。令和7年度事業の進捗状況と新年度の計画等についてご説明し、委員の皆様方から貴重なご意見、要望等をいただきました。本号が令和7年度の最終号になります。新年度は4回（6月、10月、12月、3月）の発行を予定しております。